

被災写真とメディア 「思い出サルベージ」被災写真返却活動の現場から Flooded Photos and Medium

◎ 溝口佑爾¹
Yuji MIZOGUCHI

¹ 日本学術振興会（京都大学） Japan Society for the Promotion of Science (Kyoto University)

Abstract This paper is a report of “Memories Salvage” Project that relieved approximately 700,000 flooded photos by IT in Yamamoto town. In addition, this paper presents some topics about “media” studies: different specialities between analogue (paper) and digital (data), specialities of photo as a media, photos as a device of familiarity, scraps as a media, and so on.

キーワード メディア、東日本大震災、写真、情報支援、地域

1. 報告の概要

本報告では、宮城県亘理郡山元町にて津波にのまれて持ち主不明となった写真約 70 万枚を IT を駆使して救済し、持ち主に返却するプロジェクトである「思い出サルベージ」を題材として、現地活動に従事している立場から、被災した写真の返却に焦点を当てた報告を行う。「思い出サルベージ」は日本社会情報学会若手支援部会災害情報支援チームによって行われた復興支援活動であり、本報告は 1 年以上に渡る支援活動の成果報告も兼ねたものである。また本稿は 2011 年 12 月に行われた「第四回知識共有コミュニティワークショップ」での報告を発展させたものである。

本報告で焦点を当てるのは、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災において発生した津波にのまれ持ち主不明となった写真（意以下、被災写真）の持ち主への返却活動と返却の現場であるが、その際にメディアを切り口とする。ここで言うメディアとは広義のメディアで、媒質あるいは材料のことであり、マスメディアや情報技術に限らない。メディアに着目するのは次の理由による。被災した写真の救済活動である「思い出サルベージ」を進める中で驚いたのは、写真というメディアの特殊性であるからだ。後に見るように、巨大災害下の特殊状況において露出したのは、写真が持つ親密性のデバイスとしての側面であったと言えるだろう。

もちろん、メディアとしての写真の特殊性について直接に論じるためにはさらにさまざまな事例を用意しなければならないだろう。しかし、まずはメディアを切り口として被災写真に関する事例を整理していくことで、写真というメディアに関する考察、並びに一般的なメディア概念に関わる論点の提出をここでは試みたい。

2. 「思い出サルベージ」の概要

「思い出サルベージ」は、日本社会情報学会若手支援部会災害情報支援チームによって情報技術を通じた復興支援の一環として宮城県亘理郡山元町にて行われた活動で、同町で回収された約 70 万枚の持ち主不明

の写真の情報技術を駆使して救済し、持ち主へと返却するプロジェクトである。

山元町は、宮城県と福島県の境目に位置する海沿いの町である。海と山が近く、イチゴとりんごとホッキ貝が名産の町だ。東日本大震災では津波により大きな被害を受け、町の居住地域のうちの約 62%が浸水し 2,209 棟が全壊した。もともとの人口は 1 万 6 千人であったが、死者数は 632、行方不明者数は 1 となった（2012 年 6 月 1 日現在）。しかし、これほどの甚大な被害にも関わらず、山元町の被害状況がメディアで伝えられることはほとんどなかった。これは、防災無線が壊れたことによって震災当初に町外への情報発信が遅れたことと関係していると考えられている。

災害情報支援チームは、東日本大震災による山元町での津波被害の深刻さを受けて、大妻女子大学の柴田邦臣准教授の呼びかけにより組織され、2011 年 4 月 6 日より同町にて情報技術を利用した復興支援を行ってきた。当初は情報の盲点となった山元町において情報検索および情報発信を可能とするため、避難所での PC 設置や、地元災害 FM「りんごラジオ」のブログ作りなどを行った。しかし、現地に滞在しながら活動を続ける中でニーズとして上がったのが、被災した写真の救済であった。



図 1：被災写真

要望を上げた町民に話を聞いたところ、被災者の多くが津波に飲まれた写真を抱えており、それが劣化していくのでデジタル化して保存することが求められていることがわかった。津波で何もかもを流された被災者たちにとって、写真は唯一自分と家族のアイデンテ

ィティを保証するものであり、また時に死者の代わりとなるものであった。写真は実存の土台であったのである。デジタル化して保存したいという写真の例が図1である。

当時、持ち主不明となった被災写真は町のいたるところに存在した。瓦礫の搜索の際に出てきたアルバム等の思い出の品を自衛隊や消防団が自主的に集めたものが山元町の道端や避難所の脇に置いてあったのである(図2)。



図2：避難所脇に集められた被災写真

4月末には町内各所で回収された思い出の品が、津波被害にあった小学校の体育館に集められつつあった(図3)。



図3：小学校体育館に集められた写真

4月末には町内各所で回収された写真と思い出の品が、津波被害にあった小学校の体育館に集められつつあった(図3)。体育館があふれるほどの量に膨れ上がった写真、それも海水に浸かった影響で劣化し続ける写真を救出するため、山元町役場と災害情報支援チーム、そして各種企業の協力で始まったのが「思い出サルベージ」である。サルベージ(salvage)とは海難者を救うという意味である。「思い出サルベージ」は町内に約70万枚あった持ち主不明の被災写真を、洗浄しデジタルカメラにより複写(デジタル化)(図4)した後、町内の施設である「ふるさと伝承館」にて展示しIT技術を駆使して持ち主へと返却する(図5)というプロジェクトである。



図4：洗浄とデジタル化

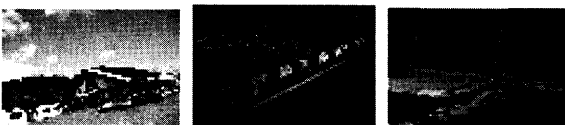


図5：展示と閲覧の様子

当初は、流された写真そのものを来館者が直接探すスタイルであったが、写真の探索は徐々にデジタルデータを駆使した返却の工夫が整備されていった。8月には結婚式「結婚式」等のキーワードや名前から写真を検索できるクラウド上のサービス「みんなのおもいで」がニフティ株式会社の協力で始まった。9月には、デジタルデータを利用してアルバムのカタログ「インデックス・カタログ」を作製した。これはそのままでは取り出して見ることの難しい被災アルバムに関して、1ページに1冊のアルバム情報を収めた目録的なカタログである。11月からはその場で撮った写真や手持ちの写真を読み込み、顔から検索するサービス「顔画像認識」が始まった。こうした検索の工夫もあり、2012年6月8日の時点で約21万枚の写真を返却することができた。

洗浄とデジタル化については、2011年度のワークショップ「街の思い出サルベージアルバム・オンライン」での報告を参照されたい。今回焦点を当てるのは、その後の持ち主への返却である。

3. 被災写真返却におけるメディアの使い分け

ここでは、山元町の被災写真展示公開会場にて写真の返却に関わっている立場から、写真を返却する際のメディアの使い分けについて論じる。

写真の返却に際しては、紙媒体(写真そのもの)とデジタルメディアとを使い分ける必要がある。写真返却を、写真の閲覧(検索)と、見つけた後の返却とに分けたうえで、まずは閲覧について使い分けを紹介しよう。

山元町の被災写真展示場は、来館者に対する持ち帰りの割合が高い(何も持ち帰らない来館者が少ない)。これは、紙媒体とデジタルメディアの適切な使い分けによるものである。まずは、閲覧に関してメディアの使い分けを論じたい。

基本的には、誰でも扱えるのは紙媒体であり、デジタルメディアは閲覧者を限定する。紙媒体の場合は、洗浄の処理が終わり新たなアルバムに詰めかえられた被災写真を、一冊ずつ閲覧する。この方法は、ほとんどの来館者が等しく閲覧可能であるという意味で優れている。デジタルデータの場合、特にPCに入れたデータを閲覧することは、特定の来館者、特に高齢者には難しい。彼らにとっては、PCのみで膨大な量の被災写真を探すことは現実的ではない。

ただし、操作については、iPadなどにデータを入れることで子供や高齢者をカバーすることはできる。しかし、iPadの場合には閲覧の中断が難しいというデメリットが生じる。というのは、iPadの通常の写真閲覧ソフトにおいては、途中で写真の閲覧を中断としても、全体のうちどこまでを見終わったのか、閲覧者が把握することが難しいからである。iPadに象徴されるように、デジタルメディアは紙媒体に比べて、全体の量が相対的に把握しにくい。それゆえ、膨大な量を数度にわたって閲覧するためには、紙媒体で順番に見ていく方が確実なのである。もちろん、全体が把握し

やすいのは必ずしもメリットとは限らない。紙媒体は全体像が把握しやすい分、あまりに膨大な数に閲覧者が気力を失うことがある。

しかしいずれにせよ、紙媒体と各種デジタルメディアは性質が異なるのであり、閲覧者の年齢（あるいは情報技術への慣れ）や来館頻度に応じて、閲覧するメディアを使い分ける必要がある。

もちろん、デジタルメディアが有利な場面もある。手がかりとなるキーワード（「結婚式」や映っている人物の名前等）を登録して検索を行う場合や、顔画像から類似の顔を検索する場合である。「みんなのおもいで」システムとして紹介した者が前者であり、「顔画像認識」として紹介したものが後者である。検索が有利なところは、エリア横断的に写真を探すことができることである。山元町の被災写真は、取得された地区ごとに A～F のアルファベットがふられている。紙媒体で探すときには、かつての家があった場所から遠く離れた取得地域を見ることはあまりない。しかし、顔から検索した結果、元の自宅よりもはるかに北のエリアから写真が見つかるといったことはよく起こる。もちろん、検索によってすべての写真が見つかるわけではない。しかし、紙媒体での閲覧と組み合わせることによって、情報技術を使った写真の検索は威力を発揮する。例えば、まずは顔からの検索で一枚の写真を見つけ、その後は写真が見つかったエリアを紙媒体で順に見ていくということができる。

また、応用的には、デジタルデータをプリントアウトすることで、紙媒体と同様に手に持てる形を与え、返却に利用することもできる。アルバム形式の写真を一冊一冊を手にとって閲覧することには疲労が伴う。しかし、一冊の内容をデジタルデータから抽出して 1 ページにまとめたインデックス・カタログ（図 6）は、閲覧者がアルバムを探すのに大きく役立った。

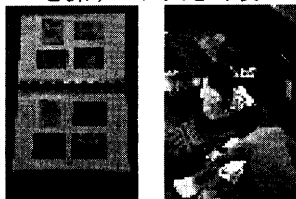


図 6：インデックス・カタログ

紙媒体のもう一つのメリットは、分業的に写真を探すことができるという点である。仮設住宅など、緊密なコミュニティに出張して返却する際には、自分の写真だけではなく隣人の写真を探し、見つけた写真はその場で手渡すことができる。デジタルメディアの場合は基本的には持ち込んだ端末の数しか画面を表示することができないので、同様のことはできない。

ただし、デジタルメディアの場合にも、複数人で閲覧することが効果をもつことがある。例えばプロジェクターを使用して一枚の画像を複数人で閲覧すれば、持ち主の特定の可能性は格段に向上する。もちろん、検索の効率は紙媒体の方が早いのであるが、

以上は閲覧に際しての話であったが、返却に関して

も同様のことが言える。基本的には持ち主への返却に適しているのは紙媒体である。デジタルデータでの返却は、持ち帰る人を限定する。そして、実際に持ち帰ることが望まれているのはデジタルデータではなく元の写真である。

しかし、「思い出サルベージ」を進める中で、返却の場面に際しても、デジタルデータ、あるいはプリントアウトが必要となる場面が二つ出てきた。

一つは、写真の劣化の状況がひどい場合である。図 7 左は 5 月にデジタル化した時点での画像なのでまだ顔が判別でき、そのおかげで子供の写真として見つかった。図 7 中は、同じ写真の 10 月に持ち主の引き取りのあった時点での状態を記録したものだ。劣化が進み、顔がわからなくなっている。持ち帰り申請者本人の希望により、デジタルデータをプリントアウトして渡すことになった（図 7 右）。この時点で小さな頃の子供の写真は他に見つからなかったそうで、プリントアウトは唯一の思い出として大変に喜ばれた。現物の写真の劣化を見越して、デジタルデータが必要となる場面が出てくるのである。もちろん、デジタルデータそのものではなく、プリントアウトされて手に取れる形の方が望ましいのではあるが、

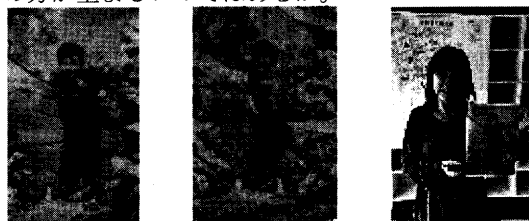


図 7：劣化した写真のプリントアウト

デジタルデータが必要となるもう一つの場面は、集合写真等の、見つかった写真が個人の所有物というよりは集団の記憶であるような写真の場合である。同じものが何枚も作られている集合写真の場合、誰が本当の持ち主であるかを特定することは難しい。そこで、デジタルデータから複製を行うことで、早い者勝ちの状況を防ぐことができるのである。集合写真以外にも、町内の卒業アルバムもまたデジタル化し、複製可能にすることが有用であった。卒業アルバムは、2012 年 6 月までに 632 冊の需要があった。

メディアの観点からは、同じく手に取れる形ではあるが、流された写真現物と、デジタルデータのプリントアウトとの違いは重要であろう。目に見える違いとして、プリントアウトには光沢があるのに対し、写真現物はそのほとんどが光沢が失われているということがあげられる。卒業アルバムのプリントアウトを持ち帰った来館者が、その光沢を見た瞬間に目に涙を浮かべるといったこともあった。津波で写真を流された被災者にとっては、光沢は震災で失われたものが取り戻されることの象徴でもある。その意味では、同じ紙媒体とはいえ、写真現物とプリントアウトとは異なったメディアとなっている。

4. 写真とメディア

以上、被災写真展示公開会場での経験から、技術的

な観点でのメディアの使いわけを指摘した。重要であったのは、同じく写真を表現するメディアである紙媒体とデジタルメディアがことなる特性を持っているということである。紙媒体とデジタルメディアは、それぞれが写真の持つ異なる側面をとらえていえるだろう。

集合写真をデジタルデータで複製することが求められることは、私的なものと想定されがちな写真にも、公的な要素があることの証である。紙媒体が写真の私的な側面をとらえていたのに対し、デジタルメディアは写真の公的な側面を露出させているのである。

このことは、集合写真だけではなく、写真の内容が私的なものである場合、例えば一人で写っている写真の場合にもあてはまる。デジタルメディアを使った写真の検索によって浮かび上がるのは、写真の持つ集合的な側面である。

例えば、「みんなのおもいで」システムにて映っている人物の名前を手がかりとして収集するときのことを考えよう。「みんなのおもいで」は、写真に映る人物の情報を他の町民から収集して、それをクラウド上にタグ付し、来場者の名前から検索できるようにする。これは、一人で写っている写真であっても、その人物が埋め込まれていた社会的ネットワークと無縁ではないことを利用したものである。

本来的には、写真には画面内の被写体と、画面外の撮影者との社会的なネットワークが映し込まれているといえる。しかし、被写体と撮影者の関係のさらに枠外には、地域の親密性のネットワークが潜在するのであり、それをつなぐデバイスとなるべき役割が写真に備わっている。タグ付された手がかり情報の網目によって、写真を取りまく社会的なネットワークは形を与えられる。情報技術を使うことで浮かび上がるのは、写真のそのような社会的な側面である。

5. シフトするメディア：傷ついた写真

前節では写真の画面内と枠外、それぞれが紙媒体とデジタルメディアに託されていることを論じてきた。しかし、メディアの観点からは、被災した写真についてはもう一つの要素を指摘することができる。それは、津波が写真につけた「傷」である。

被災した写真現物は、通常の写真と同じではありえない。被災写真は劣化し、洗浄したとしても色素が欠落していることも多い。しかし、驚くべきは閲覧者が自分の写真を特定する精度の高さである。極端な例をあげよう。図8は持ち主の元に帰った写真である。海水等の影響でその色素の重要な部分が失われているため非常にわかりにくい写真だが、持ち主にはこの写真に刻まれたかつての飼い犬の姿がはっきりと浮かび上がるという。



図8：持ち帰られた写真の一例

メディアの側面から注目したいのは、被災写真においては情報を担うものとしてのメディアにズレが生じていることである。通常の観察者にとっては紙というメディアの上に載せられた色素という第二のメディアの元で実現されている画像（この場合は意味不明な写真）こそが情報である。しかし、被災写真の持ち主にとってはその写真の持つ情報はかけている画像にはない。もし主はむしろ欠落した画像自体をメディアとし、在りし日の画像を情報として受け取っている。被災写真においては、持ち主と他者との意味のズレが、メディアのズレ（傷）として形を与えられているのである。

メディアの階層的にシフトに関しては、社会学者ニクラス・ルーマンの後期の研究におけるメディアの議論を参照することができるだろう。後期ルーマンにおける「メディア」は、その都度の階層構造において下位に位置する可塑的な「素材」的存在のことである。最前線のメディア概念の最前線が、被災写真において具体化されている。

最後に、写真につけられた傷をメディアとして、写真に対する新たな意味づけが生まれていくつかの例を紹介しよう。まずは震災後新たに獲得された社会性という意味づけが傷に託される可能性をあげることができる。ある来館者は、写真に傷がついたことに肯定的な意味を与えていた。その傷は震災の爪痕である一方で、流された写真を集めた人・洗った人・自分に返すために展示した人がいたことの証でもあるという。先に述べた写真の社会性は、写真に潜在していた震災前の社会的ネットワークに限定されていた。しかし、震災後にできた社会的ネットワークもまた、写真に潜在していたのではないか。写真にできた傷にこそ、その余地が託されている。

もう一つ、顔からの検索での例を上げよう。顔画像認識は類似の顔の検索であるため、副産物的に家族の顔が見つかることがある。注目したいのは、自身の顔から検索して息子の写真が見つかった男性の次のコメントである。「これまで意識したことはなかったけど、やっぱり親子なんだなあ。」紙媒体での検索とは違って、顔からの検索で見つけたことにより、持ち帰る一枚は親子の絆を示す一枚へと意味づけを変えるのである。このことから、情報技術を介することで、写真の（社会的な）意味づけが変わる可能性を読み取ることができる。傷は、写真が眠らせていた親密性のデバイスとしての役割を呼び込むのである。

参考文献

- 1) Luhmann, N., 1990, *Die Wissenschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2009, 徳安彰訳, 『社会の科学』法政大学出版局.)
- 2) Luhmann, N., 1995, *Die Kunst der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2004, 馬場靖雄訳, 『社会の芸術』法政大学出版局.)
- 3) 大黒岳彦 [2006]: 『「メディア」の哲学：ルーマン社会システム論の射程と限界』NTT出版.